



介護と撰取

デーサービスでの一場面

「春江さん。ごめんネ、もうすこし辛抱してネ」

看護婦さんが、一人の老婆に覆いかぶさるようになして、介護をするのです。

喉に痰が詰まって、呼吸も苦しいのです。病人の背中を撫でながら、機械の管で痰を除去するのに必死懸命の介護です。

ほかのデーサービス利用者ももうとっくに全部送り出しました。お昼過ぎからこの時間までこの介護作業は続いているのです。

「少しは楽になりましたか」

「はいはい、ありがとさん。ちいとは楽になりましたわ。ナンマンダブツ」。

しかしまたしても、息が詰まりそう。

この懸命な介護の姿は、わたしいたく感銘しました。とてもだれにでも出来ることではありません。

「介護」とはこのようなものかと、あらためて考えさせられました。

それで家へ帰って、その感動さめやらぬ中で、辞典で「介護」の「介」と言う文字を調べてみました。案の定、「介」という漢字には、いまの看護婦さんの姿（ころが、そのまま丸ごと語られていることを知ってまた驚きました。

「介」という字は、人が鎧で身を固めている形を字にしたもの、だから人の体に覆いかぶさって守る意味に使われ、介抱などということばもできました。また「介」という字はもの間に深く強く入り込むという意味もあって「介入」というようにもつかわれます。

とするとあの春江さんに覆いかぶさるようにして懸命に、春江さんの苦しい病のなかに分け入って必死に介護していたあの看護婦さんの姿が「介護」そのものなのだという事を知りました。

すくなくとも看護や診療のように、病人や病気を冷たく冷静な目で見るのとは違うのだということも知らされました。

と同時に、如来様のお働きを「撰取」または「撰取してすてたまわず」というけれども、それも同じことだナと知らされました。

「撰取」というのは、病人を丸ごとわが胸に抱きかかえ親のいのおさめとろうとはたらいてくださるはたらき。親に背を向け如来から逃げようとするものをこそ、追いかけて追いつがって抱えこもうとするはたらき。それが南無阿彌陀仏の如来さまなのだ聞いておられます。

そのことに気がついたとき、「ああ、あのおばあちゃん、あるときナンマンダブツといていた。あるときにも如来様はあのようにはたらいて下さったんだと、人事ならず、わたし思わずお念仏申したことでした。

春江おばあちゃんは、あれから一日おいて亡くなられました。



お念仏を
称えて迎える
新世紀

播磨東組 中井 修

兵庫県門徒推進員連絡協議会

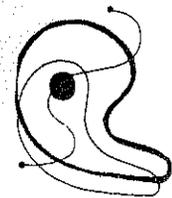


世紀開闢元旦

如是我聞

事実と学ぶより

真実に聞こう



門徒総代

勝林寺 住職 西池 匡
前住職 西池 哲俊
坊守 西池 美幸
寺族 西池 深音
西池 希里
西池 入海

田中 保夫 生田 善七
宮嶋 千秋 兼井 通夫
平野 稔 玉井 啓介
坂本 克美

勝林寺仏教壮年會

会長 永井孝一郎
顧問 龜井 孝
副会長 大石 正和
中島 武志
横山 弘三

副会長 山田 芳美

會計 足立 幸夫 坂本 貢
齋藤 節夫 齋藤 保
古田 敬治 宮嶋 達也
村田三喜男

事務局

勝林寺仏教婦人会
会長 岩上加代子
副会長 関川 鈴子
稲葉 節子
大月千鶴子
中川 政野
大石 正代
齋藤 昌子

勝林寺仏教婦人会

会長 岩上加代子
副会長 関川 鈴子
稲葉 節子
大月千鶴子
中川 政野
大石 正代
齋藤 昌子



お念仏を
称えて迎える
新世紀

播磨東組 中井 修

兵庫県門徒推進員連絡協議会

新世紀2001年

一月のこしよみ

- 一日 修正会・年始まいり
- 二日 年始まいり
- 四日 但東年始まいり
- 五日 内町区総会
(五日〜七日は本山参詣等で不在)
- 八日 成人式・和屋報恩講
- 九日 出石報恩講・DS
- 十一日 出石報恩講・友遊クラブ
- 十二日 出石報恩講・DS
- 十三日 松総代△△
- 十四日 坪口女中講
- 十五日 坪口報恩講
- 十六日 坪口報恩講・DS
- 十七日 阪神大震災神戸別院追悼法要
覆見報恩講
- 十八日 兵庫教区企画常任委員会
- 十九日 覆見報恩講・DS
- 二十日 覆見女中講
- 二十一日 代議員△△
- 二十二日 朗読ボランティアあすなる
- 二十三日 DS
- 二十五日 教区基幹運動研修会

友遊クラブ

友遊クラブ

- 二十六日 DS
- 二十七日 神明組同朋運動研修会
- 二十九日 朗読ボランティアあすなる
- 三十日 DS

二月の予告
四日(日) 勝林寺仏教総会
十一日(日) 勝林寺仏教評議員会



学級崩壊を見て

幼稚園児の祖父

小学校5年生、朝3時間目の算数の時間。ものの十分もたないのに、突然A君が後ろの席のY君に、「おい、3時にはうちへ来いよ。新しいゲームソフト、おやし買ってくれたんや」。

それを発火点にしていゆるあの学級崩壊。蜂の巣をつついたようにとはまさにあの状態。

「いいな、いいな。おまえんとこのおやじ、気がきいてるじゃんかー」

女の子も、「うち、二度飛び三〇回できたんで」なんて言って、教室の後ろで勝手に縄跳び始めるのです。

「こらー、いま何の時間おもうとるんや。算数やれー。勉強やらんかい」

「算数ちっともできんでも、うちのじいちゃん。のんびりと80なってもげんきやでー」

「うちのばあちゃんも」

「うちのおやじだって算数しらんと町会議員やってんねー」

これが世にいう学級崩壊です。

こうなるのは、その原因はどこにあるのでしょうか。

わかりました。ある幼稚園の父母の集まりで、園長先生がこの話をなされて、

「どうぞみなさんのご家庭でも、人の話が聞けるような子供に育てていただきますよう」と、情熱こめて講演なさったのだそうです。

ところがその父母のあつまりの席で、こどもならぬ若い親たちの間に、まさしく「学級崩壊」状態が起きてしまったというのです。おかあさんどうし、父兄どうしが、園長先生のはなしそっちのけで、ヒソヒソばなしならまだかわいらしいんだけど、大声あげて笑うやら世間話・噂ばなしが飛び交ったというのですから……。



「これが、この状態が、あの学級崩壊の原因そのものじゃーありませんか」

「自分の主張、自分の考えばかり主張して、人の気持ちを思いやったり、ひとの話を聞くこともしない。そんなわたしたち親の生き方のなかから、子供たちのあの学級崩壊が生まれてきて、こりやー不思議でも偶然でもありませんな」

親鸞さまも蓮如さまも、そのことをおっしゃっていたんだと知らされました。

「聞即信」といって、真宗で「信心」というのは、とにかくおしえを聞くこと。聞いて聞いて聞いているうちに、如来様のお慈悲が聞こえてくるとおっしゃいます。

上人さまたちがそう教えて下さったのは、そのころの世のなかが「学級崩壊」の時代だったからだとおもいます。

わたしはこんな修行を、わたしはこんな信心をと、面々がみることばかり主張して、だれもお釈迦さまのほんとうの教えを素直に真剣に聞こうとはしなかった。だから、親鸞さま蓮如さまが出て、「信心を主張するな。それよりも素直に真剣に、如来さまの呼び声をお師匠さまたちの教えを、ともかくも聞くではないかと、教えてくださったのだと思います。



葬儀

十二月六日 下小田

木本 博様 (七七才)

十二月六日 榎見

湯口ちよの様 (八五才)

十二月十八日 榎見

横山千江乃様 (七九才)

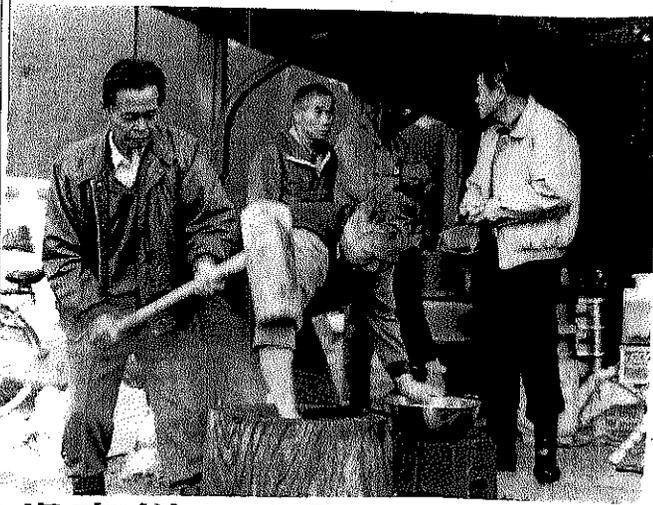
成人式

おめでとう

- 岡野 里恵さん
- 生田 元規さん
- 永井 慎也さん
- 田中 吾郎さん
- 斎藤 孝子さん
- 岸下 貴子さん
- 湯口 裕也さん
- 立脇 陽介さん
- 関森 宗幸さん
- 亀井 由佳さん
- 永井 由佳さん

新しい世紀ひらけた年に成人式を迎える人々に、門徒ごぞつてお祝いとお励ましの声援をおくりましょう。

寺から、「お祝いのごとば」に添えて小冊子『歎異抄』を贈ります。



歳末餅つき風景 (二十七日)

平成十二年度

代議員会

勝林寺にとっても平成十三年は新たな世紀の開闢(幕開け)です。

昨年四月わたしたちの寺は「伝灯継承奉告法要」をしました。新任職を中心にして勝林寺はいま新しい世界に第一歩を踏み出しました。

新しい「てら」を、新しくどのように作り上げていくか、みんなで真剣に考えていかなければなりません。

日時 一月二十一日 午前九時半より

協議題

- ①平成十二年度経過報告
- ②平成十二年度諸会計決算報告
- ③平成十三年度行事計画審議
- ④平成十三年度諸会計予算案審議
- ⑤その他

『議案書』は十三日の総代会後に全戸配布致します。

